

“科学的驚異”の物語と植民地主義

—— J・ヴェルヌから G・メリエスに至る月世界旅行の光と影 ——

寺 本 成 彦

キーワード：SF小説／植民地主義／ヴェルヌ／ウェルズ／メリエス

1969年にアポロ11号が人類初の月面着陸を果たしたとされてから、早くも半世紀を^{けみ}開する。アメリカ合衆国で企てられたこの前代未聞のアポロ計画は、しかしある意味では“科学的驚異”⁽¹⁾の系譜に属する物語の中で想像上幾度か達成されてきた月世界旅行⁽²⁾を、当時の科学的技術の粋を用いて実現したに過ぎないとも言えるのではないか。とりわけ、ジュール・ヴェルヌが19世紀半ばを過ぎた頃に発表した冒険SF小説『地球から月へ』(1865)と『月を回って』(1869)の二部作が砲弾発射による人類の月への到達(未遂)⁽³⁾の顛末を描いたのを出発点として、ジャック・オッフエンバック作曲のオペレッタ『月世界旅行』(1875)、H・G・ウェルズのSF小説『月世界最初の人間』(1901)、そしてジョルジュ・メリエスの短篇映画『月世界旅行』(1902)といった一連の作品が、20世紀半ばの「人類初の月面到着」に想を与えたと捉えることの方が自然であろう。

月世界旅行を主題とする上述した5つの作品間に張りめぐらされた影響関係については、別稿で既に論じたところである⁽⁴⁾。そこでは、小説あるいはオペレッタ台本のテキストから映画へのメディア変換および、それと並行的に生じる小説テキストに付された挿絵から映画への変換について分析し、ジャンルを異にする作品間の複層的なネットワークに基づく間-メディアの変容の詳細を明らかにした(表1を参照)。その際には触れられな

かったことだが、この月世界旅行を主題とする作品には——後ほど論じるように、オッフェンバックによるオペレッタを別にするなら——、19世紀のヨーロッパで高揚した帝国主義的拡張の気運と植民地主義的欲望との関連のもとに考察すべきモチーフが少なからず含まれているように思われる。現実世界では未知の大陸や島々を目指して水平方向に伸長されていた行程が、虚構の物語においては移動の軸線が垂直方向に変えられてはいるが⁽⁵⁾、宇宙空間におけるこの新たな領土探索の旅程には、当時の植民地主義の痕跡をいくつか見て取ることができる。その様相を各作品中に順次跡付けながら、J・ヴェルヌからG・メリエスに至る月世界旅行の虚構物語が現実世界のイデオロギーをいかに反映しているのか、そしてそれを想像上の世界でいかに具現しているのかを探ってみよう。

表1 『地球の中心への旅』と“月世界旅行”5作品間で共通するモチーフ

	砲弾=ロケット	巨砲鑄造	“奇人”クラブ	月の雪嵐	地球の出	異形の月人	地下世界*	巨大葎*	月人による捕縛	月人との闘争	海面への着水	祝賀会*
地球の中心への旅 (Verne 1864) *							○	○				
地球から月へ (Verne 1865)	○	○	○									
月を回って (Verne 1869)	○	○	○								○	○
月世界旅行 (Offenbach 1875)	○	○		○	○		○		○			
月世界最初の人間 (Wells 1901)				○		○	○	○	○	○	○	
月世界旅行 (Méliès 1902)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

*前の論考では特に言及していない作品、モチーフ。

1. J・ヴェルヌ『地球から月へ』と『月を回って』における“植民地共和国”の夢

19世紀の冒険小説作家として名高いジュール・ヴェルヌ（1828-1905）は、『海底2万マイル』（1870）、『地球の中心への旅』（1864）、『80日間世界一周』（1873）といった諸作において、当時最先端の科学的知を巧みに援用した多様な虚構物語を創作したことで広く知られている。そういった一連の作品の中で、第二帝政末期に刊行された月世界旅行の連作の第一作である『地

球から月へ』⁽⁶⁾ は南北戦争後のアメリカ合衆国を舞台とする。内戦において発展を遂げた弾道学と砲術の裏付けをもとに、巨大な砲弾を月面まで到達させようという計画とその実行、そして砲弾 = ロケット発射までを描く物語である。先述したアポロ計画の最も有力な発想源であると思われるこの小説において、月にまで砲弾 = ロケットを届けようという企てが、戦争という情熱を傾けられる対象を喪失したガン・クラブの会員たちが新たに熱中することのできる無償の行為であるのだが、それはフランスからの訪問者ミシェル・アルダン⁽⁷⁾ の介入によって性格を異にするものとなる。単に砲弾を月にまで到達させるという“無人ロケット計画”を、このフランス人は“有人ロケット”にすべきであると強硬に主張し、その理由をアメリカ人たちに次のように説明する。

われわれは、あの未知の世界のコロンブスたるべき運命にあるのかも
しれないのです。[...] 私は諸君を月世界征服にお連れしようではあり
ませんか。さすれば、月の名がこの偉大なる合衆国を構成する 36 州の
名に加わることになるのです！ (p.22)

合衆国建国以降加速した西部開拓によって消滅しつつあった「フロンティア」を新たに設定し直そうとするような口吻である。しかし旧大陸から舞い込んできたエトランジェの発するこの“檄”は、アメリカ合衆国人のメンタリティーに訴えようとする意図を持つにとどまらず、広く欧米世界が、そして個別的には（未だ来たらざる）“フランス共和国”——小説の時代設定では、その当時のフランスはまだ第二帝政下にあった——が目指すべきユートピア建設の理想を喧伝するという含意もあると、われわれは事後的に知らされることになるだろう。実際、月世界旅行物語の後篇に当たる『月を回って』⁽⁸⁾ では、既に月を目指して宇宙空間を飛行する砲弾 = ロケットの中でこの冒険の意義に疑問を呈する他の乗組員に、やはりあのミシェル・アルダンが高らかに宣言するのである。

なんで？ 合衆国の名の下に月を領有するためじゃないか！ 連邦に第40番目〔ママ〕の州を付け加えるためじゃないか！ 月の諸地方を植民地化し、耕作し、そこに移民し、芸術、科学、産業の驚異という驚異をことごとく持ち込むためじゃないか！ 月世界人がわれわれよりも文明化されていないければ、彼らを文明化し、彼らがまだ共和国を形成していないければ、代わりに作ってやるためじゃないか！」(pp.286-287)

小説の同じ箇所を引用しながら杉本淑彦も指摘するように、「ヴェルヌが植民地拡張と共和政樹立とを結びつけて考えていたこと」⁽⁹⁾は間違いないであろう。そして同じ杉本も続けて言及するように、「月世界植民地化の主体がアメリカ合衆国と措定されていることよりも、「植民地＝文明化＝共和政樹立」を主張したミシェル・アルダンがフランス人として描かれていること⁽¹⁰⁾こそが意味深長なのである。大統領が国家元首であることからすれば「共和国」に分類することも可能ではあるアメリカ合衆国の帰趨を配慮するこのフランス人の言葉の裏側に、1789年のフランス革命以来数度の挫折を被って反故にされたフランス共和制への回帰願望と、来たるべき共和制下での植民地経営の抱負がむしろ垣間見られるのではないかという推測は十分に成り立つだろう。そしてこれは「共和国の理想が花開く植民地帝国を建設するという夢⁽¹¹⁾」なのであり、“植民地共和国”を将来地球上の未踏の地に創出していこうと目論みつつ、当時は雌伏していた共和主義者たちの指向を窺わせるものである。

ミシェル・アルダンという人物設定に垣間見られる、「どの国にもましてフランスによる「フランス革命理念＝共和政」の植民地への適用を「文明化」ととらえるヴェルヌの心性⁽¹²⁾」は、この第二帝政末期の時期においていかに形成されたのだろうか。作家の出身地が、早くから奴隷貿易（いわゆる「三角貿易」）で富を蓄積していた港町の一つであるナントであったこと、『地下世界旅行』刊行直後の1864年に入会することになったパリ地理学協会⁽¹³⁾での活動などいくつかの要因を挙げることができるだろう。だがフランスの本格的な植民地経営のための制度が整い始めたのがやっと1880年代中盤

以降であったことに鑑みれば⁽¹⁴⁾、月世界旅行 2 部作でヴェルヌが、自らの友人ナダールをモデルとする登場人物を通して開陳した「啓蒙」(技術・産業・教育の伝播)、「革命の理念の伝播」としての領土拡張と植民地化計画は⁽¹⁵⁾、来るべき第三共和制の“夢”を随分先取りしていたと見做さざるを得ない。そしてその計画の実行については『月を回って』の別の箇所でも、次のように具体的に示されていた。

パーピケイン〔ガン・クラブ会長〕の実験以来、アメリカ人にとって不可能なことなどなくなってしまったように思われていた。彼らは早くも、学者派遣団だけではなく、入植者の一団を、そして、月世界を征服するために、歩兵、砲兵、騎兵からなる軍団をまるごと一つの岸辺に送り込むことを計画していたのである。(p.401)

ヴェルヌによるの月世界旅行 2 部作が「未来を先取りする小説 roman d'anticipation」(「SF 小説」の別名)である所以は、実はこの近い将来に起こることになっているフランス共和国の帝国主義的・植民地主義的進展を、「アメリカ合衆国」という仮の姿を借りながら先取りしていたことにもあるのではなかろうか。

2. J・オッフエンバック『月世界旅行』における王朝国際主義

フランス第二帝政期、『天国と地獄』(1858)や『美しきエレヌ』(1864)、『パリ生活』(1866)などのオペレッタ諸作の作曲家として絶大な人気を博したジャック・オッフエンバック(1819-1880)は、皇帝ナポレオン 3 世退位後の第三共和政下においても 10 年余りの間創作活動を続けていた。1875 年に初演され、1877 年に再演された彼のオペレッタ『月世界旅行』⁽¹⁶⁾では砲弾 = ロケットによる月までの有人飛行が舞台上で繰り広げられており、ヴェルヌの月世界旅行連作からある程度のヒントを得たと考えられる⁽¹⁷⁾。但し、ほぼ同時代を生きたこの冒険小説家の構想した月世界旅行とオッフエ

ンバック作曲のオペレッタのそれとの大きな違いとして、前者では月への着陸が達成されなかったのに対して、後者では無事に月面に有人ロケットが着陸できた点、そしてその後地球人が月面を探索できたことをまず挙げるができる。それに加えてオッフェンバックのオペレッタでは某国の王ヴラン、王子カプリース、大臣ミクロスコーブといった“ロケット乗組員”が、ヴェルヌ『月を回って』では発見され得なかった月人の存在とその町を目撃する。

（月に一つの町。奇妙な国、風変りな建物。）

カプリース——（その間自分の周りを見つめ、その後で）でも、パパ、以前おっしゃっていたようには人気ひとけがないようでもありませんよ、ここは…… 私たちは町にいるのです。（pp.9-10）

この直後、地球人たちの前には「月人 Sélénite」の団が、月の王国の王コスモスを先頭に姿を現す。そしてその時、彼ら「月人」の姿かたちが地球人と何ら変わらず、しかも地球人に理解できる言葉（フランス語）を話すのだということが判明するのである。

（そうしている間にも、コスモスとカクテュス〔王の廷臣〕および月人たちが徐々にやって来て、好奇の目で地球人たちを見つめる。

——喜劇的情景用の音楽）

コスモス——そなたたちの目の前には、月の王国の君主、偉大で令名高きコスモスがおるのだぞ。恐れ多くも、直接言葉をかけることはあいならぬ。

民衆——万歳！ 万歳！（pp.10-11）

このオペレッタの上演の様態を報じる雑誌記事に載せられたイラストからも分かるように（図1参照）⁽¹⁸⁾、月の王国の住人は中国風ないしは中東風とも見える衣装を着けた人間の形をした登場人物であったことが確認される。

この最初の遭遇が果たされた後、地球からやって来た3人は月世界の王コスモスに怪しまれて捕縛されるが、王子カプリースと恋仲になった月世界の王女ファンタージア、そしてその母の王妃ポボッテの助力もあって窮地を脱する。しかし地球から持ち込まれたリングを食べた月人たちが、月の王国では法律によって禁止されている恋愛に目覚めたため、それを秩序壊乱と見做したコスモスによる地球人の幽閉がなされる。しかし大団円に至って、火山の噴火から危機一髪のところを助かった登場人物たちは和解し、月の地平線から昇る地球の姿を共に愛でる。



図1

地球から月世界の王国に恋愛がもたらされ、恋に落ちた地球人の王子カプリースと月人の王女ファンタージアの婚姻がやがて執り行われるであろうという予感のもとに幕を閉じるこのオペレッタの荒唐無稽に見えるストーリーに寓意されているのは、当時のヨーロッパ諸国における王朝間の宥和・協力関係、姻戚関係を結ぶことによる融合関係に他ならないであろう⁽¹⁹⁾。舞台をはるかに遠い月世界に置きながら、そこで繰り広げられるのはきわめて身近なヨーロッパの政治情勢に立脚した出来事に他ならない。この王朝国際主義に基づくSF風俗劇が大当たりをとったのがフランス第三共和制下であったということに一抹のアイロニーが感じられるのではあるが、それがあくまで月の王国での出来事であるというファンタジーとして当時の観客には受け取られていたことは想像に難くない。

確かに王朝国際主義は、ヨーロッパ諸国の有する帝国主義的な野望と決して無関係である訳はなく、歴史も教えるように、むしろ第三国への威圧・軍事的優位を獲得するための方途の一つであったことは言うまでもない。しかし、それは一義的には主としてヨーロッパ諸国の力関係に影響を与え

るものであり、即座に植民地主義的な野望につながるものではないとひとまず考えられるだろう。

3. H・G・ウェルズ『月世界最初の人間』における植民地主義的夢——貧窮からの脱出と、“原住民”との意思疎通の試み

19世紀の月世界旅行物語の系譜に連なる作品の一つとして、イギリスの作家H・G・ウェルズ（1866-1946）によるSF小説、『月世界最初の人間』⁽²⁰⁾（1901）を挙げないわけにはいかない。SF小説の古典となった『タイム・マシン』（1895）、『透明人間』（1897）、『宇宙戦争』（1898）の後に刊行されたこの物語が、先行するシラノ・ド・ベルジュラック『日月両世界旅行』（1662）、エドガー・アラン・ポー「ハンス・プファールの無類の冒険」（1835）、さらにヴェルヌによる月世界旅行2部作の影響を受けていることは既に指摘されているとおりである⁽²¹⁾。ケント州リンブネにある海辺の村に蟄居する科学者ケイヴァーが発明した重量のほとんどない気体によって浮かび上がる宇宙船に、友人のベッドフォードが便乗し、二人して月世界探索を行うというこの物語において特筆すべきことは、それまでの月世界旅行物語ではほとんど触れられてこなかった月世界（地表と地下世界）の詳細な様子と、惑星外生物である異形の月人との遭遇と闘争、地球人の言葉（英語）で月人との意思疎通を試みるというディテールがあるという点である。

ウェルズの物語によって“月世界最初の人間”となったケイヴァーとベッドフォードであるが、この二人はある意味で対照的な役割を割り当てられていると見做されるだろう。研究者肌で利欲に恬淡としているようなケイヴァーに対して、元実業家で劇作家でもあるベッドフォードの方は、月面で試食した未知の茸のおいしさと、それが生じさせる亢進作用もあって、次のように口走るのである。

「すてきにうまい。人口過剰の地球にとっちゃあ、たいした住家だよ、ここは。あー、ああ、わが地球のあわれな過剰人口よ！」（p.99）

地球を遠く離れた惑星上に見出した美味な食物に大層満足したベッドフォードは内心、「月にこそ、わが人類が困窮した際の避難所として最大の可能性がある」(p.99)と考え始めるのだが、それは植民地獲得を目指す19世紀のヨーロッパ諸国の動機と軌を一にするのではなからうか。

続いて、月を領有し植民地化しようという案が、茸のせいでも醜聞したベッドフォードによって再び提案される。

どういふ風の吹き回しか、ぼくの考えは、再び、植民計画に戻ってきた。

「われわれは、この月世界を併合しなければならない」

ぼくはいった。

「それは一刻のゆうよも許されない。これはわれわれとしての義務の一部だ。ケイヴァー……われわれは……ヒャック……亭主……じゃなかった、大守さまだ。かの偉大なるジュリアス・シーザーにおいてさえ、夢想だにしなかったほどの大天国だ。[…]

(pp.100-101)

ヴェルヌの月世界旅行小説に登場したフランス人、アルダンの提唱する植民地化による「啓蒙」にも「文明化」にも、ましてや「共和主義の伝播」にも無縁なこのイギリス人の唱える植民地主義には、母国の物質的な欠乏を植民地の富によって満たすという物質主義的な側面のみが、カリカチュアのように付与されているだけである。

そして彼らが月人の集団に出くわすのは、この醜聞のさ中である。

やつらは、6人で一列になり、岩の上を歩きながら、ヒューヒューというような、ひどく変った、引きずるような音をたてていた。やつらもすぐに、われわれに気づいたらしい。顔をこちらに向けて、みな一瞬、化石したように動かなくなってしまった。(p.101)

この異形の月人たち(図2参照)⁽²²⁾に対する地球人らの反応はいかなるものだったのか。これまで比較的冷静沈着だったはずのケイヴァーも「こ

の虫けらどもめ！」と繰り返しつつやくや、突如「憤怒に駆りたてられたように、大股に3歩ほど進んで、やつらに跳びかかった」(p.101)のだし、ベッドフォードも「猛烈に格闘し」(p.102)ながらも、月人に捕縛されてしまう。

地球を離れた人跡未踏の場所を出くわした異形の二足歩行動物に対して衝動的ともいえる攻撃性を発揮する2人のイギリス人の心的態度は、SF小説という想像上の世界での出来事にとどまらない射程があるように思われる。未知の土地で遭遇する

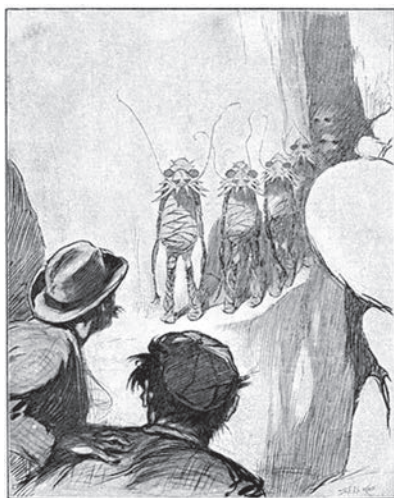


図2

言葉の通じない異形の“他者”に対する最初の行動が、故のない不安と恐怖を払拭するための、そして力関係における優越性をまず築くための武力制圧であったという点は、現実の植民地においてもしばしばなされていた可能性が高いのではなからうか。このような「野蛮」の制圧は、ウェルズの小説では次に見るようにさらにエスカレートし、月人らの追撃を逃れようとするベッドフォードによる無差別殺戮にもつながっていく。

初めの一分間で、死骸の山が築かれた。ぼくは興奮し、だれかれの見さかひなく打ちかかり、飛びかかった。敵方は、その勢いに吞まれて、すっかり戦意を喪失してしまっただけだ。それ以後、戦いらしい戦いは挑んでこなかった。ありきたりのいいかたをすれば、一面血の海だった。右に左に、バツバツとなぎ払い、打ち倒しながら、ぼくは背丈ほどの草原にでもわけ入ったように、この細い、草を被ったようなやつらの間を駆けずり回った。(p.152)

この一連の殺戮を終え、高揚感の冷めやらぬまま「実際、月って、なんて面白い所なんだろう」(p.153)という結論めいた感慨を叫んだ後、ベッドフォードは負傷したケイヴァーと生き別れのまま宇宙船に辿り着く。こうして彼は、やむなく単身で地球に帰還することになるのだが、物語はまだ終わらない。地球に帰り着いたベッドフォードは月に居残った科学者の友人が発信する無線を探知し、はるかかなたの惑星でのケイヴァーの生活をわずかながらでも知ることになるのだ。

途切れ途切れに受信される月からのケイヴァーの通信を、オランダのさる電気学者の好意によって読むことのできたベッドフォードは、月の地下世界の構造や、月人たちの作りあげる社会と彼らの労働のあらましを知ることになる。しかし、それ以外に彼の注意を引いたのは、ケイヴァーが「フィウー」と「チパッフ」と名付けた、監視役の二人の月人に英語を教え込んでいるという事実だった。

ケイヴァー氏も〔…〕彼らに向かい、同じ言葉をいくども繰り返していっては、実物を指し示したらしい。おそらく、その順序は、いつもおなじだったろう。フィウーが、まずしばらくケイヴァー氏に注意を向ける。それから、同じものを指さして、いま聞いた言葉をいうのである。(p.213)

月の地下世界において捕われの身となっているケイヴァーではあるが、人間大の昆虫のように見える月人二人と、短時日のうちに英語による意思疎通ができるようになったというのだ。月世界に侵入してきた地球人から「文明語」の手ほどきを受けたフィウーとチパッフは、片言の英語を話すようになり、例えばフィウーは相方のチパッフについての“人物”評を次のようにケイヴァーに伝えている。

「彼〔チパッフ〕は……〔…〕言葉覚えるのすき。だれよりも、おどろくほどたくさん覚える。考えない。書くことない……ただ覚える。〔…〕

歴史を。なんでもいう。いちど聞く……いつでもいう⁽²³⁾」 (p.215)

ケイヴァーの月面からの通信に読まれるような、異形の他者に対する英語教育、そしてその他者が習得する片言の英語（ピジン・イングリッシュ）による表現とは、フランスに先駆けて19世紀末までには世界中に植民地を築いてきた大英帝国によって取られてきた、「原住民」を従順にし手なづけるための主要な方策の一つを彷彿とさせるように思われる。「野蛮」な他者を徹底的に武力制圧しなくとも、言葉によって彼らを制御することによって操り、植民地経営のための人的資源として効率よく働かせることこそが植民地支配成功の鍵であったのだから。

4. G・メリエス『月世界旅行』における月の王国壊乱と、捕獲された月人の見世物

これまで時系列に沿って見て来た、19世紀における月世界旅行の系譜の最後に連なるのが、ジョルジュ・メリエス（1861-1938）の短篇映画『月世界旅行』⁽²⁴⁾（1902）である。このフランスの映画監督が生み出した500本以上にのぼる全作品の中でも、とりわけ大きな評判と高い評価を得てきたこの映画作品は、傑出した特殊撮影によって月への到着と探索および地球への帰還を詳細に描き出している。別稿でも述べたことであるが⁽²⁵⁾、メリエスは先行する科学的驚異の作品群およびそれに関連する視覚的資料（小説に付された挿絵、オペレッタに関する雑誌記事のイラストなど）から自分が必要だと思った要素を自在に抜き出し、自身の創意も大いに盛り込みながら、この「複合素材による映画作品 composite film」⁽²⁶⁾を作り上げることに成功している。このSF映画『月世界旅行』の幻想的であると同時にリアリスティックな映像とそこに反映していると考えられる植民地主義イデオロギーの一端をあぶり出してみる前に、まず20世紀初頭のフランスの時代背景を確認しておこう。

歴史家グザヴィエ・ヤコノが指摘するように、1870年から1900年こそ「フ

ランス帝国主義がもっとも昂揚した時期」⁽²⁷⁾であった。このフランス植民地主義の研究者によれば「この間に、植民地の拡張を支持する潮流が反対勢力を決定的に陵駕し、30年におよぶ激動の歴史を経て、全体で1100万平方キロメートルの領土と、4000万の人口を抱えるまでになった」⁽²⁸⁾ということである。平野千果子も述べているように、インドシナ制覇を押し進めていた第二帝政時の海軍大臣、シャルルー＝ローバが1864年にパリ地理学院会長に就任して以来、この学術団体は「文明」と「交易」を目的とする植民地拡張に本格的に乗り出すようになる。次いで1885年にはパリ大学に「植民地地理学講座」が開設され、植民地の“制度化”がその端緒に就く。さらに1889年に創設された植民地学院が植民地行政官の養成を開始、1894年には植民地省が独立機関となる⁽²⁹⁾。従って映画草創期である19世紀末に映画製作者・映画監督となったメリエスは、フランスが植民地帝国としてイギリスと肩を並べ始めた時代の趨勢の中で創作活動を進めていたことになるだろう。

そのメリエスの代表作の一つである『月世界旅行』（1902）には実際、ウェルズ『月世界最初の人間』で確認されたような〈月人との闘争〉が映画の山場の一つとして見られる。砲弾で人間を月に送るという計画に賛意を示した天文学者たちのグループは、当初は純粋に科学的な好奇心と野望からこの計画に乗り出したであろうことは、それから30年ほど前にヴェルヌによって書かれた月世界旅行2部作であるガン・クラブ会員らが企てた最初の計画（無人口ケット＝砲弾を月面に到達させること）を彷彿とさせる。しかしいったんこの天文学者の一団が月面に着くや、寒さを逃れてもぐりこんだ地下世界で出くわしたのは昆虫とも爬虫類ともつかぬ、両手が鋏になっている2足歩行動物の群れであった（図3-1、3-2参照）⁽³⁰⁾。その具体的な姿かたちが、ウェルズの小説の最初のフランス語訳に付されたイラストから想を得たものであるということは別稿でも既に指摘したところだが⁽³¹⁾、この異形の“原住民”を目にした地球人たちがこの惑星外生物との乱闘に至ることも、『月世界最初の人間』での二人のイギリス人の反応と軌を一にしているのである。

映画中のこの挿話に着目した映画史家エラ・ショハットとロバート・ス

タムはメリエスを「帝国の言説を共有している」映画製作者の一人として位置づけ、彼の『月世界旅行』を「領土拡張論者の航海やオリエンタリストの空想に関する〔…〕数多くの映画⁽³²⁾」の系譜の中で捉えようとする。



図 3-1

〔…〕男根のようなロケットが月（宇宙のフロンティア）に貫き刺さるのは、（帝国の）他の「フロンティア」をめぐる歴史的言説を別の次元で再現したものだ



図 3-2

（セシル・ローズ〔大英帝国の植民地政治家（1853-1902）——論者註〕が「できることなら惑星まで併合したい」とよく言っていたように）。この作品は植民地に囚われた物語である。槍を持った骸骨のような生き物が、月にある偽のジャングルから飛び出てきて探検隊を捕えるが、結局、探検隊の男に、魔法のように野蛮な生き物を消し去る銃に似た傘で打ち負かされる。どんな意味においても、これは植民地主義「についての」映画ではなく、帝国拡張のアナロジーと解釈できるだろう⁽³³⁾。

「善悪の二元論により[……]新しい土地やその先住民族と闘う⁽³⁴⁾」この「ヒーロー」たちは、ウェルズの小説でベッドフォードとケイヴァーが示していた「文明人」の行動パターンに従いながら、月世界の秩序に対してさらなる壊乱を試みることになる。それは捕縛されて連れて行かれた月の王宮で、玉座に収まる月世界の王の権威主義的で横柄な態度に接して憤った地球人が自ら縛めをほどいて立ち向かい、月世界の支配者を地面に叩きつけて雲散霧消させてしまうという顛末である（図4参照）。目の前で王を弑逆された兵士たちが混乱するのに乗じて、天文学者らは遂には月からの脱出に成功するのであるが、この波乱万丈の活劇に潜まされているのは、＜専制君主の排除＞という「革命」の端緒であり、圧政から植民地を解放するという共和国の理念に他ならないのではなかろうか。



図4

次に、「複合素材による」この映画作品の中で、メリエスが独自に創出したエピソードを取り上げ、それが植民地主義の開花する歴史的な文脈において持つ意義について考えてみよう。それは映画の最末尾、月人の兵士たちの追撃から何とか逃れた天文学者たちが砲弾＝ロケットの中に飛び込み、地球に向かっての帰還を果たす大団円である。地球人たちを追って来た月人の一人が、月世界の崖から自由落下していく寸前の巨大な砲弾にかろうじて取りすがると（図5参照）、その砲弾と共に地球の大洋に落下していく。その後無事に海面に浮きあがった砲弾＝ロケットにとりついたらそのまま、この異星人は陸地へと艦船によって曳航されて地球人の町に連れて行かれると、月への到達という偉業をたたえられる“宇宙飛行士”たちと共に、群衆の前をパレードさせられる羽目になる。歓呼の中広場に着いた天文学者たちは、市長によって名誉の“月メダル”を与えら

れ喜色満面であり、その面前に首に縄をかけられ曳かれて来た月人は促されるがままに、祝賀の音楽につれて軽やかに踊り出すのである（図6参照）。

この映画の結末が、既に検討したウェルズの『月世界最初の人間』の、〈月人から逃亡して地球に辿り着くベッドフォード〉の逃避行に準じていることは確かであろう。そして、敵対的な月人たちを手当たり次第になぎ倒し、命からがら宇宙船に辿り着き地球に降り着いたその元実業家とは対照的に、月に居残ったために月人とのコミュニケー

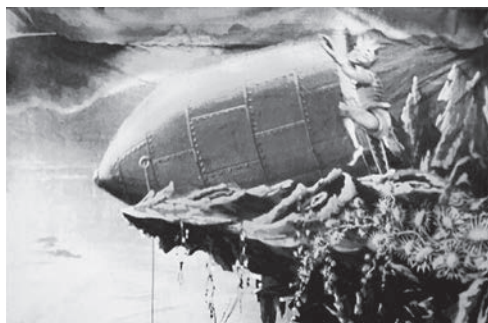


図5



図6

ションを試みた科学者ケイヴァーに比肩するような登場人物の方は、メリエスの『月世界旅行』には見られないという相違点を確認しておこう。その理由はいくつか考えられるが⁽³⁵⁾、異形の“他者”との必要最小限の意思疎通もこの映画では顧慮されていない点は否みがたい。

ところで、このウェルズの小説も含めて、それに先立つ19世紀の月世界旅行物語群にはなかった〈異星人の地球への拉致〉がメリエスの映画で導入されていることの意味は何であろうか。メリエスの独創に属するこの細部をこれまで本論で論じてきた植民地主義の伸長というフランスの歴史的文脈に置き、空間移動の方向を垂直軸から水平軸に置き替える時、月から連れ帰った異星人とは、地球上のはるか遠方のこれまで未到達であった地

点で入手できた別世界の形見なのであり、踏破された“彼方”を表象する<異形の他者>を本国において領有することを含意するのではないか。異形の月人という“旅土産”、さらには未知の領域への到達という偉業を誇示するための“戦利品”を自国の群衆の前で見せつけるこの「歓迎パレード」という儀式は、植民地建設が重要な国家事業となりおおせた 20 世紀初頭のフランス社会で広く共有されていた intérêt (利益/好奇心) のありかを示すものであると考えられるのである。

最後に、この<異世界から持ち帰った富としての“他者”>の領有が、紛れもないひとつの見世物として享受されていることに留意するなら、次のような事実を想起させるのではないか。即ち、一方では「1889 年と 1900 年の〔パリ〕万国博覧会では、植民地にもかなりのスペースが割かれ⁽³⁶⁾」、実際 1889 年にはベトナム人狙撃兵が駐屯地で寛ぐ様子や、カピリア人の職工の実演が「展示」され、ニューカレドニアのカナック族の踊りが余興として楽しまれていた事実を⁽³⁷⁾、そして他方では、その当時の映画という娯楽が見世物師たちによって買い付けられ、まさしく見世物の一部として興行されていたという事実である。学術的ないし政治的な文脈と並行的に、純粋に娯楽を楽しもうとする好奇心に満ちた視線が、植民地のエグゾティックな風土と異形の“他者”に向けられるべく組織化されていた時代と、メリエスによる月世界旅行物語の細部とは響き合っているのではなかろうか。

* * *

19 世紀における科学の飛躍的進展に関する知見を活かし、想像力の赴くままに繰り返し展開されていく月世界旅行の物語は、地球上における“彼方”の征服および伸長する植民地経営と決して無関係ではありえなかったことは、ある意味で当然であるかも知れない。オッフエンバック作曲のオペレッタ『月世界旅行』を別にすれば、ヴェルヌとウエルズの小説作品も、メリエスの短篇映画も、それぞれ植民地主義的な時代背景が反映したと思われる細部、筋立てを含んでいた。そのことと、20 世紀半ばに<共産主義体制

勢力への優位性の誇示を目標として進められていた月面到達計画との類縁性は一見何もないように思えるのだが、高度な科学技術が異質の“他者”に優越し、そのことでそれを支配したいという欲望に加担し、それを具体化させていったという点では軌を一にするように思われるのである。

註

- (1) “科学的驚異” (merveilleux-scientifique) は、科学的知見に基づきながら、奇想天外な物語を創出しようとする文学的営為を指しており、SF 小説もちろんその範疇に包摂される。
- (2) 私市保彦も指摘するように、“月世界旅行”はギリシャのルキアノス(120-195)以来、シラノ・ド・ベルジュラック『日月両世界旅行』(1662)、エドガー・アラン・ポー「ハンス・プファールの無類の冒険」(1835) も含め、繰り返し取り上げられてきた文学的テーマである (私市保彦『名編集者エツツェルと巨匠たち フランス文学秘史』、新曜社、2007年、p.243)。
- (3) いよいよ宇宙空間を旅していくことになった『月を回って』では、思いがけぬ隕石の接近のために砲弾＝ロケットの軌道がわずかに逸れたため、3人の“宇宙飛行士たち”は月の上空を周回するだけで、その後地球に無事帰還するという顛末が語られている。
- (4) 寺本成彦、「*ジョルジュ・メリエス『月世界旅行』と“科学的驚異”の系譜——〈テキスト／挿絵／映画〉の間 - テキスト性と間 - メディア性を巡って*」、『Correspondances (コレスポンドランス) 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』、朝日出版社、2020年、pp.635-650。
- (5) 移動の方向を垂直上方ではなく垂直下方に伸ばすなら、ヴェルヌの『地球の中心への旅』(1864)で展開される地中世界の冒険となることは言うまでもない。
- (6) Jules Verne, *De la Terre à la Lune. Trajet direct en 97 heures 20 minutes*, Paris, J. Hetzel, 1865. 邦訳は次の訳書に依拠し、そのページ数で引用箇所を示す。『ジュール・ヴェルヌ<驚異の旅>コレクションII 地球から月へ / 月を回って / 上も下もなく』、石橋正孝訳、インスクリプト、2017年。なお引用部分の下線は、これ以降もすべて論者による。
- (7) Michel Ardan の姓を構成するアルファベを並び替えると Nadar となること、また草稿段階ではそもそも「アルダン」の代わりに「ナダール」と記されていたことから、ヴェルヌの親友でもあった写真家・気球旅行家ナダール (1820-1910) が、このフランス人冒険家のモデルとなっていることは明らかである (Cf. フォ

- ルカー・デース『ジュール・ヴェルヌ伝』、石橋正孝訳、水声社、2014年、p.208)。
- (8) Jules Verne, *Autour de la Lune*, Paris, J. Hetzel, 1869. この作品からの邦訳も『ジュール・ヴェルヌ<驚異の旅>コレクションII』(前掲書)に依拠する。
- (9) 杉本淑彦『文明の帝国——ジュール・ヴェルヌとフランス帝国主義文化』、山川出版社、1995年、p.241。
- (10) 前掲書、p.242。
- (11) N. バンセル、P. プランシャール、F. ヴェルジェス『植民地共和国フランス』[2003]、平野千果子、菊池恵介訳、2011年、岩波書店、p.2。
- (12) 杉本淑彦、前掲書、p.242。
- (13) Cf. フォルカー・デース、前掲書、pp.211-212. 1821年に創設されたパリ地理学協会は1864年以降、フランスの植民地化推進に舵を切ったこと、さらに同年に入会したジュール・デュヴァルが、「植民地を一種の理想郷と捉える立場」であったことを補足する (Cf. 平野千果子『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』、人文書院、2002年、pp.164-165)。
- (14) Cf. 平野千果子、前掲書、pp.166-167。
- (15) Cf. 前掲書、pp.170-171。
- (16) このオペレッタ台本は再演の年に出版されている：Albert Vanloo, Eugène Leterrier, Arnold Mortier, *Le voyage dans la lune*, opéra-féerie en quatre actes et vingt-trois tableaux, Musique de Jacques Offenbach, Représenté pour la première fois à Paris, sur le Théâtre de la Gaîté, le 26 octobre 1875 (Direction Albert Vizentini), Repris au Théâtre du Châtelet, le 31 mars 1877 (Direction Castellano), Paris, Tresse, 1877. 以下、このオペレッタからの引用はこの台本からの拙訳により、ページ数のみを示すことにする。
- (17) 実際このオペレッタを目にしたヴェルヌは自作を盗用されたと思い、告発まで考えたという (Cf. フォルカー・デース『ジュール・ヴェルヌ伝』、前掲書、p.292)。
- (18) フランス国立図書館所蔵のイラスト (FRBNF44373628) の一部を引用
- (19) フランスだけに絞っても、ルイ 13 世 (ブルボン家) とスペイン王女アンヌ・ドートリッシュ (ハプスブルク家) との婚姻 (1615)、ルイ 15 世 (ブルボン家) と元ポーランド王スタニスラスの娘マリとの婚姻 (1725)、さらにルイ 16 世 (ブルボン家) とオーストリア王女マリー・アントワネット (ハプスブルク家) との婚姻 (1770) が想起される。
- (20) H. G. Wells, *The First Men in the Moon*, London, George Newnes, 1901. この作品からの引用は次の邦訳を使用し、以下そのページ数のみを示す。H・G・ウェルズ『月世界最初の人間』、白木茂訳、早川書房、1967年。但し訳語には、必要最小限の変更を加えた。

- (21) N & J・マッケンジー『時の旅人 <H・G・ウェルズの生涯>』〔1973〕、村松仙太郎訳、早川書房、1978年、p.238.
- (22) H. G. Wells, *The First Men in the Moon*, *op.cit.*, inserted after p.130.
- (23) この片言の英語を以下、原文で示す。
- He [...] love remember words. Remember wonderful more than any. Think no, draw no — remember. Say [...] histories — all things. He hear once — say ever.
- (H. G. Wells, *The First Men in the Moon*, *op.cit.*, p.302)
- (24) Georges Méliès, *Voyage dans la lune*, 1902, France, 16 min (Original color version restored by Lobster Films, Groupama Gan Foundation and Technicolor Foundation, 2011.
- (25) Cf. 寺本成彦、前掲論文、p.636.
- (26) Cf. Thierry Lefebvre, "A Trip to the Moon : A Composite Film", in Matthew Solomon (ed), *Fantastic Voyages of the Cinematic Imagination : Georges Méliès's Trip to the Moon*, Albany, State University of New York Press, 2011, pp.49-63.
- (27) グザヴィエ・ヤコノ『フランス植民地帝国の歴史』〔1993〕、平野千果子訳、白水社、文庫クセジュ、1998年、p.69.
- (28) 同所。
- (29) Cf. 平野千果子、前掲書、pp.161-166.
- (30) J. Malthête, L. Mannoni, *L'Œuvre de Georges Méliès*, Paris, La Cinémathèque Française / Éditions de La Martinière, 2008, p.133 より引用。
- (31) Cf. 寺本成彦、前掲論文、pp.648-649。なお、『月世界最初の人間』の仏訳（1902）に付された方の「月人」のイラストは以下の通り。



(H.-G. Wells, *Les premiers Hommes dans la Lune* [1901], Traduit de l'anglais par Henry-D. Davray, Illustrations de Martin Van Maele, Paris, Félix Juven, 1901, p.129.)

- (32) エラ・ショハット、ロバート・スタム『支配と抵抗の映像文化——西洋中心主義と他者を考える』[1994]、早尾貴紀〔監訳〕、内田（蓼沼）理絵子・片岡恵美 訳、法政大学出版局、2019年、p.133.
- (33) 同所。なお、ここで言及されている〈月面に突き刺さる砲弾＝ロケット〉の様子を、連続する2つのショット＝タブローによって示しておこう。



- (34) 前掲書、p.139.
- (35) 無声映画であり、その上字幕も全く用いられていない『月世界旅行』において、地球人が異星人に言葉の手ほどきを行うというエピソードは映像のみでは理解されないままであったことは想像に難くない。また、メリエスが参照した可能性の高い『月世界最初の人間』の仏訳（1901）は一種の短縮版で、月に残されたケイヴァーが地球との通信を図る部分に当たる第22章から第26章が削除されていた。従って、〈月人への英語レッスン〉のくだりも、フランスの映画作家には知られないままであったのかも知れない。なお、ウェルズのこのSF小説の仏訳完全版が日の目を見るには、映画製作後11年を待たなければならなかったことを補記しておく（Cf. H.-G. Wells, *Les Premiers hommes dans la Lune* [1901], Traduit de l'anglais par Henry-D. Davray, Illustrations de Claude Shepperson, Paris, Calmann-Lévis, 1913）。
- (36) グザヴィエ・ヤコノ、前掲書、p.73.
- (37) 田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』、思文閣出版、1985年、pp.151-152. またこの点に関連して松田京子は、1903年（明治36年）に大阪・天王寺で開催された第5回内国勸業博覧会に関する著作で、「博覧会において、植民地をパビリオンという形で展示するという発想は、[...] 当時の帝国主義諸国に共通する思考のあり方」であると指摘している（松田京子『帝国の視線——博覧会と異文化表象』、吉川弘文館、2003年、p.57）。

Le merveilleux scientifique et le colonialisme dans l'Europe du XIX^e siècle

—Le dessous du voyage dans la lune de J. Verne jusqu'à G. Méliès—

TERAMOTO Naruhiko

Dans les domaines littéraire, théâtral et cinématographique, nous avons traité d'une série des récits du voyage dans la lune : *De la Terre à la Lune* (1865) et *Autour de la Lune* (1869) de Jules Verne, *Le voyage dans la lune* (1875) de Jacques Offenbach, *Les Premiers Hommes dans la Lune* (1901) de H. G. Wells, *Voyage dans la lune* (1902) de Georges Méliès. Et cela, dans le but d'en révéler les symptômes de l'époque du colonialisme en progrès dans l'Europe du XIX^e siècle.

D'abord, dans les deux romans d'anticipation de Verne, ce sont des États-Uniens qui consacrent leur passion et leur argent pour lancer le projectile de canon jusqu'à la lune afin de prouver leur technique d'artillerie. Pourtant, y intervient le Français nommé Ardan qui leur inspire la nouvelle idée non seulement de l'exploration de la lune, mais aussi de son exploitation, voire de sa colonisation. Venu de la France sous le second Empire, ce double de Nadar, un ami de Verne, souligne les droits et les devoirs de la République — à savoir des États-Unis et/ou de la République française à venir — qui consistent à civiliser les « sauvages » et de propager le républicanisme dans les pays qui « stagnent » dans un état non républicain.

Ensuite, quant à l'opérette composée par Offenbach au début de la III^e République, elle met en scène une rencontre d'une famille royale de la Terre et celle de la lune : parvenue à la lune en projectile, celle-là est accueillie par celle-ci, tantôt hostilement, tantôt bienveillamment, pour aboutir au dénouement de la réconciliation des deux familles royales, et du consentement au mariage du prince terrien et de la princesse sélénite. Il s'agit ici, non pas de l'ambition colonialiste, mais de l'internationalisme royal qui associe politiquement les familles royales européennes jusqu'au XIX^e siècle.

Confrère anglais cadet de Verne, H. G. Wells écrit lui aussi un roman de science-fiction qui relate le voyage dans la lune. Ce sont deux britanniques, l'un scientifique, l'autre ex-entrepreneur, qui tentent l'aventure dans la planète lunaire où ils tombent sur des Sélénites, une sorte de grandes fourmis bipèdes. Ayant le

projet de coloniser la lune, l'ex-entrepreneur, plus agressif que l'autre, en vient à massacrer des Sélénites-soldats, d'abord effrayé, ensuite éprouvant de la joie. Quant à l'autre terrien, scientifique, obligé de rester à la lune après la fuite de son ami, il essaie d'enseigner sa langue à des Sélénites qui arrivent à parler une sorte de *pidgin-english*. Et cela nous laisse penser naturellement à la clef du succès de la colonisation : l'enseignement de la langue des colonisants aux colonisés, ressources humaines à exploiter.

Enfin, empruntant des motifs et des détails aux ouvrages fantastiques précédents qui relatent l'un après l'autre le voyage dans la lune, le court-métrage de Georges Méliès, *Voyage dans la lune*, nous montre, comme les romans de Verne et l'opérette d'Offenbach, le projectile lancé jusqu'à la lune, et, comme le roman de Wells, la rencontre avec les Sélénites en forme d'insecte. Comme déjà lu dans *Les Premiers Hommes dans la Lune* dont la première traduction française a paru en 1901, les terriens se battent avec les soldats du royaume de la lune, sont attrapés par ceux-ci, et prennent ensuite la fuite après le meurtre du roi des Sélénites. Au retour de la lune, les « astronautes » sont accueillis chaleureusement par leurs compatriotes devant lesquels est traîné un Sélénite capturé; dans la fête célébrant l'exploit aérospacial, celui-ci est invité à danser à la musique alors que les terriens l'observent avec curiosité et joie. Ce qui devrait nous référer à la participation des « indigènes » des colonies françaises aux Expositions universelles à Paris de 1889 et de 1900, à l'époque où la colonisation française a été bien institutionnalisée par les autorités républicaines.